

令和6年第1回尾道市総合教育会議会議録

日 時 令和6年12月25日（水） 午後1時15分 開議
場 所 尾道市庁舎4階 委員会室
署名委員 宮本教育長

午後1時15分 開会

○末國庶務課長 お待たせしております。

定刻より少し早いのですが、ただいまより令和6年度第1回尾道市総合教育会議を開会いたします。

初めに、本会議の主催者であります平谷市長から御挨拶をいただきます。

○平谷市長 皆さん、大変お忙しい中、お集まりいただきまして大変ありがとうございます。

令和6年度、第1回目の尾道市総合教育会議にあたり、ひとこと挨拶を述べたいと思います。私が学校の教員をやりながら、また教育委員会で仕事をさせてもらったり、県教委とか、それから尾道の教育長というような形で教育行政を担わせていただいてまいりました。広島県の首長の中でそういった経歴を持つ市長はいないんです。それでいろんな形で県の教育委員会のやってることだとか、近隣の教育委員会が取り組んでいることとか、いろんな形で私のほうに情報が入ってきたりします。

教育というのは大変難しいなということを思いながら、指導者によって、指導の仕方によって、非常に子どもたちが変わってくるという、今日、尾道高校のラグビー部が全国大会ということへ向けていくわけですけど、尾道高校のラグビー部の指導を、新しい監督になって、全くというぐらい指導方法が変わりました。

ひと昔前であれば、大きな声で、まあいろんなことも言いながら、子どもを鍛えてきて、結果、その時代の子はそれについていきながら成果を出してきて、本当に人間的にも育ってきている子が多いんですけど、今の新しい指導者は、そういった目線で子どもたちを指導しない。どのような言葉で言ったときに子どもたちが響いて動くようになるかというような話を、ずっと指導者としてのコーチングの仕方を勉強し続けているんですね。尾道高校の野球部も致知という本を読みながら人間性の育成を目指してということで、子どもたちに読ませながらそれで指導をするということです。昔だったら1人グラウンドで大

きな声を出してやっていたんですけど、今は全く違う指導の仕方になっているということのようです。

そんな意味で言うと、従来のクラブ活動の指導じゃなくて、尾道高校のラグビー部は放課後火曜日と木曜日だけ2時間、朝の練習はずっとやっていて、週末は練習試合とかやるんですけど、その中で自分たちで自主的に時間の使い方も考えさせるんですね。そのような指導方法で、強さということではなくて、人間的な形成をやるという指導の仕方になっているんです。

それが今度は、指導の仕方の中でドローンを飛ばしたり、それからモニターをグラウンドに出したりということで、目線で子どもたちに考えさせるということで、指導の仕方というのが大きく変わってきて、それで子どもたちが自分たちで考えていって、高校生活の3年間を勉強もクラブも自分が生き生きと活動できるということで選んで来ているというような話になっている。多分県内のそれぞれの地域で今あるような、昨日も福山の東署の警備課と縁があって話をしてて、学校によって、中高も含めて荒れているところがあったり、様々な入試改革があったりする中で、公立高校の位置づけが非常に難しくなったり、いろんな課題があるように思うんですけど、まちづくりからみても、学校教育と社会教育は物すごく大きな働きを持っているというように思っています。その中で時代に合うような視点での指導の仕方とか、在り方というのは考えていく必要があるのではないかというふうに思っているところです。

その中で、まちづくり全体で、国においてもウェルビーイング指標と、心地よいか幸せ感とか、そのような形で全てにおいての指標ということで、今尾道市の職員も南雲先生の指導の下にウェルビーイング指標の研修をやっています。その中から政策提案を行うというところです。

全国的にも、子どもたちも大人も町の中で、いわゆる幸せであるとかそういうようなところが、これからの行政の一つの視点じゃないかということで、令和6年度からウェルビーイングのまちづくりというのをテーマにさせてもらっているところです。

今日は総合教育会議ということで、このウェルビーイングをテーマに学校教育と社会教育の2つの視点で、協議の場ということで意見を頂ければと思っています。

今日も、お昼に歩いていたら、おばあさんと話す機会があって、尾道の子ですけど大学院を出で県庁に入ったのですが、「市長さん、うちの孫はね、やめたんよ」という。人間関係とか何かあってというような、しんどくなって夜も寝れんようになってというのがあって、ウェルビーイングの逆になっている

んで、非常に一人一人においては難しいこともあるかと思うんですけど、全体としては学校教育、働いてる者も通ってる者も本当に生きがいとかやりがいを持って生き生きとするようなところへ向かって、今日は話題として話ができたらなというように思っています。どうぞよろしくをお願いします。

○末國庶務課長 ありがとうございます。それでは、議事に入ります。

尾道市総合教育会議運営要綱第3条に基づき、これより市長が議事進行を行います。

○平谷市長 私が議事を進行ということで、よろしくをお願いします。本日の会議録の署名人は、宮本教育長を指名いたします。

○宮本教育長 はい、分かりました。

○平谷市長 それでは、早速協議に入りますが、まず教育とウェルビーイングを柱に掲げているところです。

ウェルビーイングというのは、皆が気持ちよいか、御機嫌になるとか、そんなイメージですが、ウェルビーイングと聞いてもなかなか分からないので、多分学校で使うときも何かそのような平易な、いわゆる片仮名で並べるといふのが多いので、ウェルビーイングと言うより、御機嫌になるとかという言葉がなじみやすいと思っています。そんなウェルビーイングを推進するために学校教育、社会教育の様々な機会を捉えて取り組むことが求められておると思います。

そういう中で、まず第1点目が、学校教育の中で、学校現場での教師の働き方改革や知・徳・体、バランスの取れた子どもの育成について意見交換をしたいと思っています。議題の2点目は、社会教育に視点を移して、人生100年時代に学び続け活躍できる人材の育成をテーマに議論したいと思っています。

この間、中学生のリーダー研修なんかでもそうなんですけど、尾道は優れた環境を持っているというのを、もっともっとアピールしたほうがいい。例えば、美術館は5つあって、博物館も入れたら6つの施設を持っている。そんなまちは、広島県随一なんです。それで、なおかつ市立大学に芸術文化学部もあると。そのような形のものを、これは学校教育だけじゃなくて社会教育全体にも生かしたほうがいいと。

それから、昨日、県の都市建築の審議官が尾道に来られて話をしたんですけど、尾道の持つ運動施設、御調町のソフトボール球場は全国に誇れるソフトボール球場、それからびんご運動公園、これも整備をさせてもらってるんですけど、今年整備したのが今の人工芝で、これはほかの人工芝のグラウンド整備よりも非常に上質な整備をしてもらっていると。あと、アーバンスポーツを

今年やりながら、陸上競技場の電光掲示板を整備するというような形で今動こうとしています。合併した向島と因島が2つとも都市の運動公園を持っているし、瀬戸田は北と南に分かれるんですけど、北側のほうには瀬戸田中学校にテニスコートのオムニを整備させてもらって、南側はいわゆる天然の芝のサッカーグラウンド、多目的グラウンド、体育館はタラフレックスといって弾力のある床の体育館というたら、多分この辺りではそこだけみたいな話になっているんです。そういったものをしっかり使って、教育とか生涯スポーツとか、そのような形でもっともっと自信を持って、ただ環境整備なので、費用もかかるのですが、それを知った上で、学校の先生方にも施設を有効にあって、本当にいいと言えるものができればと思っております。

備後圏域でも、近隣のスポーツ施設は老朽化していたり、府中は上下のほうに人工芝をつくったりしていますが、人工芝のグラウンドがないところもある。圏域として尾道の施設を使ってもらって、交通の便利がいいので、そこも交流の軸として尾道を使ってほしいというような話もしているところです。

そんな形で、ある物をもう少し整理して、豊かな環境を持っているということをお親御さんにも近隣の人にも知っていただきながら、ある物を有効に活用するかという視点も要るのではないかと考えています。

今日は尾道の持っている優れた資源とか、もちろん人材もそうなんですけど、学校教育と社会教育の視点に分けて意見交換ができたと思います。

それでは最初に、学校教育編の知・徳・体、バランスの取れた子どもの育成について、事務局から説明をお願いします。

○金子教育指導課長 では、失礼いたします。

それではまず、本市の子どもたちの現状について説明をいたします。

初めに、本市の子どもたちのウェルビーイングの状況についてです。

お手元に配付しております資料1-1に記載しております①から⑫の項目は、ウェルビーイングに関連する主観的指標として上げられている項目です。

①から⑫の項目の横に墨つき括弧で示している数値が、令和6年度全国学力・学習状況調査児童・生徒質問紙の小学校6年生、中学校3年生の結果であります。

資料1-2も併せて御覧ください。

①から⑫の項目それぞれについて、令和4年から3年間の推移を示しております。多くの項目について数値が上がってきており、全国より尾道市の子どもたちのほうが高い項目が多い現状です。

唯一下降しているのは、中学校の②の将来の夢や目標を持っているの項目となっています。

また、⑤自分の幸福感（ふだんの生活の中で、幸せな気持ちになることがある）、これは令和5年度からの調査ですが、小・中ともに昨年度より上がり、小学校では92.9%、中学校では89.8%と約9割の子どもたちが幸せを感じています。⑥友人関係の満足度も、⑤と同様、昨年度より上がり、約9割の子どもたちが友達関係に満足していることが分かります。

子どもたちの幸福感は、勉強も大事ですが、一緒に過ごす友達関係と大きく関わっていることがこれらの数値からも改めて分かります。

なお、これらの結果については、校長会でも紹介し、各校の状況を把握するとともに、さらなる改善に向け、取組をお願いしているところです。

次に、本市の子どもたちの学力の現状についてです。

資料1-3を御覧ください。

全国学力・学習状況調査の国語、算数、数学のここ5年間の結果です。

小学校国語は全国、県と比べても高く、しっかりと力がついていることが分かります。小学校算数、中学校国語、数学は、全国、県とほぼ同等で推移しており、おおむね力がついていると言えます。

続いて、本市の子どもたちの朝食と体力の状況についてです。

資料1-4を御覧ください。

朝食を毎日食べていますかと答えた小学生は94.8%、中学生は92.1%で、全国よりも朝食を食べる子どもたちは多いですが、食べてこない子どもたちも若干いることが分かります。

学校の取組例も資料には掲載していますが、朝食を食べることと併せて朝食の中身も意識できるよう、子どもたちだけでなく保護者への啓発も今後必要であると考えています。

次に、体力の状況です。

小学生、中学生ともに、男子よりも女子のほうが体力合計点は高いですが、どちらも少しずつ下がってきている実態です。

各学校においても、子どもたちが運動する時間を増やす様々な工夫を講じております。

最後に、本市の不登校児童・生徒数の状況についてです。

資料1-6を御覧ください。

毎年、不登校の人数が大きく増加しており、全国や広島県と比べても不登校の割合は高い状況です。

今年度の主な取組としましては、1 ページ前、資料 1－5 のとおり、未然防止、初期対応、事後対応の視点から様々な取組を行っております。

その結果、今年度の不登校児童・生徒数は、昨年度と比べ減少はしていませんが、ほぼ昨年と同様の人数で高止まりの状況でございます。

不登校支援を充実させていくことが、本市の全ての子どもたちのウェルビーイングを高めていくことにつながると考えております。

そこで、来年度、尾道教育総合推進計画 4 年目の重点取組といたしましては、資料 1－1、一番下の丸のところに書いておりますけれども、これらの重点取組により、子どもたちの自己肯定感、自己実現、人とのつながりや社会貢献意識を高めるとともに、生きる力の土台となる心身の健康にも重点的に取り組んでいきたいと考えております。説明は以上です。

○平谷市長 ありがとうございます。

説明の中で、子どもの学力や体力、それから朝食であるとか、データを基に説明をいただきましたが、不登校については少しずつよくなっているという言葉もありました。これは全国的な問題で、尾道市だけの問題じゃないのですが、逆に学校へ行かないほうがその子にとっては落ち着いている状況というようになるので、その辺の考え方がなかなか難しい。対応の仕方も学校へ行くか行かないかだけじゃなくて、逆に学校以外の場所で選択肢があるような、そうした環境を整備することも一つの案かなと思います。それで今、SSRとか、そういった取組になっていると思いますが、不登校の要因というのはなかなかこれが原因だというのはつかみにくいところがあるので、それが対応を余計難しくしているところだろうとも思います。

それでは、ウェルビーイングの観点も含めて皆様方の御意見をお聞かせいただきたいと思います。豊田先生、ずっと現場から、外から尾道高校を見たりしておられると思いますが、何かお願いします。

○豊田委員 失礼いたします。

今、市長さんの御挨拶にもありましたし、指導課長さんからのお話もありましたが、尾道の子どもたちがウェルビーイングの視点から見て、成長はどんなのかというふうなことをここで語るのは難しいと思いますけれども、一つ思いますのは、先ほどのデータの中で、勉強がよく分かるというのは結構 8 割近くいるんです。課題として思いますのは、勉強が好きであるかどうか、好き、これが中学も小学校も 6 割程度です。そうすると、勉強は学力をしっかりとつけて分かるようになってきたと。ただ、分かるようになるということがウェルビー

イングの一つの指標ではあると思いますが、もう一つ進むと、生涯学習にかけて、やっぱり勉強が楽しい、自分自身で自らやっていくのが楽しいというような段階に持っていかなければならないのかなって思います。

そうすると、勉強が楽しいということは、やっぱりその土壌としては、子どもたち一人一人が自分の存在感が認められて、そして人間関係の中で自分が発言したことが認められて、そして子どもらの中でそれが討論されてうまくいくとか、それから学級にいて安心・安全と感じる中にいれば、自分は自分の思いを出せるようになるとか、そういったような視点が学校教育の中ではこれから必要になってくるんじゃないかと思うんです。

勉強が好きと言われる尾道の子どもたちをつくっていくのに何をしたらいいのかということ、もうちょっと考えていく必要があるかなと思います。

学力面では、全国、それから県、どちらと比較してもとんとんか、それより少し上をいっているように思いますが、子どもたちが満足して、勉強が楽しくって、そしてもっとやりたいというふうな方向に持っていくために学校教育の中で何をしたらいいのかということを考えていく必要があるのかなと思います。以上です。

○平谷市長 なかなか難しい意見です。よく聞いておかないといけないですね。次に奥田委員さん、どうですか。

○奥田委員 それでは失礼します。

説明と資料1-2のそれぞれの子どもたちの動き、3年間のデータを見させてもらいまして、順調に尾道の教育は伸びているなど感じました。

私たち教育委員も学校へお邪魔して、学校が活性化していたり、子どもたちはいい学びができていてのを感じてましたので、やっぱり3年前、2年前と比べると、もう年々よくなっていると思っていたのがこの数値に出ていると思います。現場の先生方の努力が一番大きいと思うんですけども、そういうものを実感させていただきました。

この表を見ながら、少し私が気になったのは、ちょっと細かいことなんですけど、指標として最も悪いのは、中学校の国語なんです。これを見ますと、小学校の国語は国語が好きというのがどんどん伸びている、小学校の数学も数学が好きというのは伸びている。中学校になりますと、国語が好きというのがぐっと下がってるんです。それから、中学で数学が好きというのはぐっと伸びている。ですから、ここが学力の課題、ちょっとここが大きなポイントにあるのではないかなと思います。

といいますのは、私もちょっと感じていたんですけども、中学校での国語

の指導が具体的にどういう指導がなされているのか、いわゆる国語を好きになる、あるいはその後になりました学力のところも、結局あんまり好きではない、そして学力もそう高くないというのが資料の1-3に出てます。だから関連があると思うんですけども、中学校での国語の指導の仕方がちょっと薄いんじゃないかなというふうに思ってます。

中学校の国語は生徒の学習に任せるところで終わってしまって、具体的に国語を好きに、そして読解力を上げる、そして国語の学力をつけるためのいろいろな手だてがちょっと少ないんじゃないかなと。例えば朝読であるとか、そういうビブリオバトルでいろいろ表現をするとか、そういう本を読む習慣、活字に親しむ習慣を全体的にどうつくっているのかを考える必要があるのではと思っています。

そのあたりを将来的に、やはり小学校でこれだけ国語が好きなんですから、そのままずっと伸びて行って、中学校も好きになって、そして活字に親しんで読解力がアップするというような中学生、尾道の子どもたちになってくれればいいと思うんですけど、そのあたりの手だてをもう少し考えてもらおうと、よりよくなるのではないかなと思いました。細かいことですけども、よろしくお願ひしたいと思います。

○平谷市長 今の中学校の国語について、事務局から何かありますか、特にないのですか。ちょっと難しいだろうけど、今ユニクロのトップに柳井さんがおられます。その人は、最大の学びは本を読むことで、経営上のこともいろんなことも含めると、そういう境遇にあった人は世界中にたくさんいます。本を読むのが最大の学びで、いわゆる人材教育の中で職員にも本を読んで勉強してほしい。そういう意味では「本は安い」と言われてるんで、今AIとかITとか、ああいう形のものがあるけど、本から学ぶということで、本をしっかり読む環境というのか、そういったものは必要なことかなと思います。

いろんな時代的な背景とか、海外の人とか、本を読む機会があるんで、そういったことを教えるということも当然やられてるんだと思うんですけど、その辺りは教育長さん、どうですか。

○宮本教育長 本を読むというのはすごく大事なことで、私、本を読んで自分で理解して、ああそうかっていうふうに新しい考え方を本から学んだりとか、あるいは自分が体験したことがないような体験を本の中から得たりとか、すごくわくわくドキドキするようなそういった経験っていうのはしてきてるんですけども、それと個人でのそういう経験と、もう一つはやっぱり学校教育っていうのは、教室の中に子どもたちがたくさんいて、同じ本を読んでも私が感じたこ

とと村上節子委員が感じられたこと、豊田委員が感じられたことっていうのが、またいろいろ人によって違うっていう、その感じ方を交流して、どうしてそう感じたのかという理由を聞くと、ああそういうことでそういうふうに感じたのかっていうのは自分にはない感覚だったり、考え方を人から学ぶっていう、そういうことにもつながりますので、やっぱり本を読んで自分を成長させることができるんだろうと思います。

今の国語、中学校の国語が課題になっているんですけど、これからどこにそういう原因があるかっていうのは調べて分析してみないといけないなと思っています。仮説ですけど、恐らく子どもたちが考えたいなと思うことと先生が考えさせたいと思ってることの何かギャップがやっぱりあるんだろうなというふうに思いますので、その辺はまた学校現場の状況も見ながら、どこに原因があるのか調べてみたいなと思います。以上です。

○平谷市長 村上委員さん。

○村上(正)委員 不登校の子が私が思ったよりかなり多いので、心配しているところなんですけども、先ほど教育長が言われたように、先生の思いと子どもたちの思いがかなり違うと。不登校になったきっかけ、要因なんかも、子どもたちと教師で思ってることが違うと。どうしてこんなに乖離が出たのかなと思うんですけども、それを解決すれば登校するようになるんだけど、それとウェルビーイングの考え方で、やはり学校が楽しいと、友達もたくさんいると、学校へ行って、勉強もそうなんだけども遊びたいという子が増えれば来るんだと思うんです。

ただ、そうはいつでも難しいので、今たくさん不登校の子がいて、関係機関と連携されていない児童・生徒さんがいるということなんですけども、これは学校とは連携されてればいいんだけど、学校とも連携されていない、関係機関とも連携されていないということになるとちょっと深刻な問題なので、そこら辺は学校の先生方に頑張ってもらって、どこに行ってるか分からん子が絶対にいないように頑張っていたきたいと思っています。

○平谷市長 なかなか、そういった不登校になったときには、学校の先生も自分が原因かなと思ったり、様々な心情がそこにあるので、それで家庭との対応をするときに、またなかなか親御さんらの考え方とかもあって、大変なんです。先生が一人で抱え込んでも解決できないので、専門の人と相談させてもらって、いろんな対応の仕方を考えていくというのが、今基本的には取組されてるという状況だろうと思うんです。

昔、私らが学校へ勤めてとるときには、もう君は学校出席停止と言って、来んでもよろしいと言っても来よったからね。何でかと言うと人に迷惑かけると。でも、学校へ来て騒ぐことのほうが面白いから来るんよね。それがだんだんだんだん時代とともに学校に來れなくなる子どもが出だして、その來れなくなる子どもの対応をするときに、当時病院に心療の先生がおられて、そこへ行って話をしたら、もう学校の先生には対応できませんと。そのことによって、先生のほうが不登校になると。先生は周りからスーパーマンだとかスーパーウーマンとかに思われて、自分を追い込むので、極端な話、プロに相談しなさいという指導を受けたことがあるんで、それは多分今も変わらないんだろうと思うんです。

ただ、新しい取組が始まっても、すぐに結果が出ないと思うので、その辺は今のようにな村上委員が言われた課題のところも含めて、丁寧に学校と連携を取って進めていただいたらと思います。

奥田委員、どうぞ。

○**奥田委員** 不登校の問題について、朝の教育委員会会議でもちょっと発言させてもらったんですけど、尾道市で増えているということ、全国的にも増えているという中で、どういう対応がいいのかなというところを考えるわけですけど、やはりデータの的に30日以上休んでいる生徒と、本当に学校に來れなくて出席がもうゼロですという生徒と、質はまた違ってくるんだろうと思うんです。

本当にもう学校に來れないという生徒をなくするという観点で考えていくと、やっぱり休み始めた段階で早いうちに手を差し伸べてあげれば、本当の不登校にならずに終わったということもいくらか経験してます。ほんのちょっとしたことなんで、この子はこういうことにちょっと引っかかって休みがちになっていったんだなという原因が担任として分かれば、もうすぐ対応できて何とかうまく普通の生活を送って卒業していきましたけど、やっぱり何かあるときにそういう傾向が出てくるので、学校全体でしっかりいろんな目で、ちょっと休みかかった生徒を救うというか、手を差し伸べて学校に來やすいように学校がつくっていくという、そういう組織的な学校運営をすれば、私はかなりこの数値は改善できるんじゃないかなと思います。その本気度が今学校に問われていると思うので、そこを特に来年度と言わず今年度から、学校がその気になって子どもの動きをしっかり把握して、いろいろ声かけしたり、手をかけて対応を考えるという、そういうところを始めていただくと、私はもっともってこの数字はよくなるんじゃないかなというふうに思いますので、その辺いかがでしょうか。

○平谷市長 宮本教育長、どうぞ。

○宮本教育長 今、言われた休み始めたときにすぐに対応していくってことは、本当に大事なことだと思うんです。担任だけではなくて、保健室に度々来室する子ども、またその子がどういったことに悩みを抱えているとか、しんどさを感じているかっていうのは、養護教諭の先生などはしっかりと把握されていると思います。また中学校だと担任が朝から晩まで指導しているわけじゃなくて、いろんな教科の先生が指導されるので、やっぱり学校の中でどれだけ情報共有しているのかというのはすごく大事なことで、恐らく定期的に校長、教頭、それから教務主任や生徒指導主事、それから養護教諭なども含めて、学年主任も含めて、そういった子どもたちに対しては情報共有はしていると思うんですけども、もう少しそのあたりを把握して、初期対応が徹底できるような、そういう学校運営になるようにやっていきたいなと思います。貴重な御意見ありがとうございます。

○平谷市長 村上節子さん、どうぞ。

○村上（節）委員 村上です。私は、今回この資料をいただいていろいろ読んでいく中で、3点ほど思うことがありました。

学校教育を、知・徳・体、バランスの取れた子どもの育成っていうところを見たときに、以前からちょこちょこ話をさせてもらってるんですけど、全てにおいてやっぱり食育、食べること、体をつくることっていうのは、何を食べたかっていう内容っていうのがすごく大切だと思うんです。

資料の1-4のところに、朝食を毎朝食べてますかっていうのが、小学生に至ってはちょっと下がってるような状態だったりするんですけど、食べてはいるけど何を食べているかっていう内容も、やっぱりもうちょっと踏み込んで話をしていってもらえたらいいなと思います。

何か私が最近読んでいる本の中にも、もちろん私たちも含めてみんな食べてはいるんだけど、食べてる内容、いわゆる質的に栄養失調になっている。手足は動くし、頭の回転もある程度動くんだけど、実は何か栄養が足りなくて集中力が欠けていたりとか、階段の上りおりがちょっと息が切れてしんどくなったりとかっていうのは、年齢的なものもあるかもしれないけれども、その栄養自体が足りていないという、そういうことも含めて小さい頃からしっかり子どもと保護者とに伝えていってもらえて、こういうのってやっぱり積み重ねとか、死ぬまでずっとついてくるものだと思うので、もうちょっと力を入れてそこを押してもらえたらなって思ったのが1点。

2点目は、資料1-1の中の子どもたちの現状の8番と11番に、人が困っているときは進んで助けているっていうところとか、先生は自分のいいところを褒めてくれるってところが結構高いんですけど、ついこの間、私この資料をいただいたときに、もう19歳になる子どもと、あなたが小学生、中学生だったときに先生から例えば何か言ってもらった、してもらったっていうことで、今の自分に生きているものっていうのってあるっていう話をしたんです。そのときに子どもが言ったのは、小学校1年生、2年生のときの担任の先生がとにかく褒めてくれた、手伝いをしたらありがとねって、たくさん手伝ってくれるからすごく助かるよとかって褒めてくれたり、いろんなことに対して褒めてくれたことによって、自分が今度は人を助けたいっていう思いが生まれてきた、今自分がそういう状況にいるということ話を話してて、この8番と11番というのは関連性があるのかなっていうのをちょっと強く感じたということと。

3点目、最後なんですけど、この間、情熱大陸っていう番組でイチローさんのスペシャル番組を2夜連続でやっていたんですけど、その中で彼が言われてたことが、今の野球っていうのがデータに基づいていろんなことが全部決められてて、実はそれを危惧してるんだっていう。全てデータを見て動くっていうことは、考えない人ができてきているということと言われてて、これって何かちょっと教育、今の例えばタブレットとかAIとか、そういうものって考えなくてもいいとか、使う操作自体を学びさえすれば動いてくれて知識をくれる。自らが考えて、調べて、例えば足を使って調べるとか、辞書で紙をペラペラめくって調べるとかっていう、時間をかけて自ら何で調べようとかっていうことをしなくても、入力すればそこにぴよんと出てきてしまうとか、便利なんだけど、その便利が実は私たちの能力を欠いているということも、ちょっと危機感を持ちながら使ってもらえたらいいなという感じです。

ちょっと前に、私が今関わっている人の中で、小学校の3年生の女の子と年長さんをもってるお母さんと話をしたときに、タブレットってどうやって使ってるって言うたら、家に持って帰って家で宿題みたいにするんだけど、もうとにかくお母さん同士で、子どもたちタブレット使い過ぎるよねって。もういいよやめなさいって言うても、すごくするんだと。ゲーム感覚で楽しいから学べるということの、何かいい感じはするんだけど、やっぱりちょっと使い過ぎるっていうところに親は懸念を抱いてるようなので、このタブレットとかっていう便利な物を子どもたちに与えるっていうことをする前に、ちょっと一旦踏みとどまって、本当にそれでいいかどうかっていうのをもう一度考えてもらえたらなと思います。以上です。

○平谷市長 食については、さっき言われたとおり非常に危惧をしています。全国大会に行くような子どもが来たときに、朝食を食べてるかと言くと、大体食べてるといふ。何を食べてるのかと言えば、もう様々。大体、御飯にみそ汁に何とかというのはいない。パンに卵とか、どっちかといえは軽い感じで食べている。朝、腹いっぱい食べてくるような感じの子じゃない。昔は家族みんなでいただきますと言て食べたんだけど、今は中学生とかになると、夕食をみんなで食べるというのはいない。習い事へ行ったり、仕事だったり帰ってくる時間が皆違ふ。だから、一緒に食べる機会が多いのは朝、仕事でできない家庭もあると思うけど、今のように朝食をいかにしていくかというのはい課題で、教育委員会とか保育所とか幼稚園も、そこをまずみんなで一緒に頑張って、朝食の大切さの話をしたほうがいい。強制はできないけれども、その意識を持ってもらおうというのはい大切だと思います。

それから、怒られるより褒められたい。3つ叱って5つ褒めて、7つ教えて人は育つと言うんだけど、叱ることとか注意することは言うけど、なかなか褒めてくれない。だから、さっき言われたように自己肯定感を持つと言うのか、タイミングよく褒めてくれるといいなというのを大切にしないといけないですね。はい、どうぞ。

○豊田委員 豊田です。

先ほど、勉強が好きになるという子が少ないという意見を言ったんですけども、これやっぱり1つは授業の中で、先生の課題と子どもの課題が違ふ、課題設定の出し方、捉え方、これが一番大きいのではないかなと思います。

それから、フィンランドの高校生はこんなことを学んでるといふ本が出てるんですけど、それを読んだときに、日本の高校生は道徳は規則を教えられることが多い、でもフィンランドの高校生は、規則を教えるんじゃないで物事の本質を考えさせるような内容のものを教えるんだと、何年もかかって。それと、先ほど市長さんがおっしゃった尾道高校ラグビー部の監督さんが、データをたくさん集めて、それを子どもたちに見せて、そして今の動きはこの動画の中のこのこと関係があるかどうかというふうなことを考えさせる。考えさせて、そして無駄な動きをしないためにはどうすればいいのか考えなさいというように、そういうディスカッションの時間を取っているということも聞いたこともあります。授業の中に課題設定と併せて教え過ぎない、いっぱい教えるだけの時代もありましたけれども、どうやって考えたらいいか、特に反対意見や異なった意見を持っている人たちを上手に取り上げてディスカッションさせるような内容を組んでいくとか、もう授業の内容を変えていかないといけないんじゃない

ないかなと思うんです。

先日、ある学校に研究会で行きましたときに、子どもたちは3年生でしたけど、算数でいい意見を言ってたんです。もう一人の子どもが全く違う意見を言ったんですけど、先生があれを上手に取り上げて話合いをさせたらうまくいくのになと思って見ていました。

分科会で回っていたときに、そこで一言言わせてもらったんですけど、やっぱり授業の中で勉強が好きになる、得意になるという瞬間というのは幾らでもあると思うんです。それは、先生方が子どもをよく見て、今言ってる内容もよく吟味して、こういうふうなことを切り返して問うてやればうまく話合いが進むというような場をつくってやる、そして子ども同士が話合いをして、考えるような授業をもっともっと多くしていくということが要るんじゃないかなと。

そのフィンランドの本には、そういう授業がほとんどだったということが書いてありました。前にフィンランドの先生が福山へ来られたときにお話を聞いたんですけど、先生が高い教育を受けて、そして無駄のない授業を、子どもたちの思い、発想を上手に組み入れたような授業を展開しているんですと言われたのが非常に印象に残っています。尾道でも随分進んできたように思うんです、いろんなことが。もうちょっと交通整理をしてやる場所は先生の役割かなと思うんですけど、そこをもう一押し、あっこでもう一押しとやればもっと面白いのになと思うことはたくさんあります。

そうすると、やっぱりそういう場は学校でつくらないと、いつもいつもみんなが見合うわけにいきませんので、同僚の先生であったり校長先生であったり、そういう場を逃さないで、上手にその子を取り上げて話合いを深めるとか、それからやっぱり安心して学校へ行ける、教室へ入れるという場をもっとつくってやらないと、先ほどの不登校の問題とも関わって、子どもの居場所がどこにあるのかなということを常に考えながら、もっと取り組んでいくとよくなるかなと私はずっと思っています。

それと、学び方を学ばせる。何か多くのこと、知識を教えるんじゃなくて学び方を学ばせる、こうやって解いたらいいよ、こうやって意見を言ったらいいよ、前に習ったことを使うとこうなるよ、これを言うと展開がうまくいくよとか、何か学び方を学ばせるような場面をもっともっと工夫されてもいいんじゃないかなと授業を見ていて思うんですけれども。

そういうことを、小さいことであってもその子が満足するような、多くの子どもたちが満足するようなことを先生が手を差し伸べて声をかけてあげるとか

ということをもっと進めていただきたいと思います。

○平谷市長 高い授業力を、一人一人の先生の指導力というのか、そういうのはやっぱり学ばないと身につかない。その辺は授業研究とかそういう中での発問であったり、あるいはグループで学習させて発表するとか、教材ごとにそれぞれ内容が違ってくるんで、それは一人一人の先生の力をつけていく学校力にもなるんで、そういう意味ですよ。

○豊田委員 はい。

○平谷市長 昔の指導だったら、朝も昼も晩も丼飯を腹いっぱい食べようと。体が大きくなれとか、指導者が強い思いで指導して、それについてくるみたいな話でしたけど、今の若い世代はそれは嫌いだ、絶対しないと。だから、自分たちでいわゆる課題意識を持って、体力をつけるためには自分たちがどのぐらい量を食べるかということ、何グラム、何グラムと設定しながら自分らですということ。それにはコーチングという技術が身につかないとできない。いろんな指導者が来て、その人たちが言ってる言葉で、それで子どもがぱっとひらめいたときの、この先生が言った言葉の一言、二言で子どもが変わったというようなことを、指導する側がそういう意識を持って学び続けていくという、そういう職場環境も要ということなんでしょう。

大切なことは学校の中の雰囲気も、先生方の雰囲気も学び合うとか、それのために変わったとか、指導力がついて子どもの成果につながってくるということがウェルビーイングということなんでしょうか。

多分学校の教育そのものには、人によって様々な思いがあると思うんで、そういったことをしっかり生かしていくということは大切だと思います。多分、さっきあったデータで分析するというのは、データ、データと言うのは、基礎資料にはなるけど、それが全て答えを導き出していくことにはならない。多分学校教育の中の分野でいうと、特に音楽であるとか美術であるとか、様々な分野が総合的につながっていくというような話になって、全人格を形成するという、そのような形になるんだろうと思うんです。だから、毎日の日常の中では、どうしても保護者の人らと意識を共有しながら子どもたちを育てていくということだと思います。

また教師の働き方ということで、残業時間が30時間とか言うておりますが、教員のいわゆる指導をする力量をつけるための時間と働き方の時間とは少し考え方を整理しないと、どれも一緒になって議論をされているようなところがあると思うんで。

以前に比べると、昔は私らはガリ版からスタート、印刷は一枚一枚、それか

らボールペン原紙になって、輪転機なんか今みたいに回らんかったです。手で回していた、こうやって。そのことを思うと、今の時代は時間短縮になってきてるし、それでコピーとか、そういったものを駆使しながら、新しい形の働き方もあろうし、新しい形のいわゆる学びのさせ方もあるんだというふうに思います。

それから、不登校については、先ほど村上委員さんからも言っていた課題の部分、関係機関と関わっていないような人たちのことをちょっと丁寧とか、初期の段階での対応であるとか、様々な形で提言されたようなことを基にしながら、もちろん先生方が生き生きと働ける環境づくりも併せて多様な課題があると思いますけど、教育委員会としてやっぱり学校現場とか、子どもたちを育てていくということで、サポートしていく体制をこれからも連携しながら取り組んでいかせていただいたらというふうに思いますので、市長部局としてできることもあると思うので、連携しながらというふうに思います。

それと、生涯学習、社会教育も関連性がある。国が言っているクラブの地域移行、これは大変なことなので、なかなか学校で行われている内容が、それがそっくりそのまま地域で受け入れられるかどうかというのも、国はどんどんどんどん言うんですけど、逆に地域で指導できる者がいない、受皿がない。それなのに地域移行だけ言われるということで、これは市長会も含めて、国へも言っていないといけない。広島市とかは文化系のいわゆる指導者が、教室がたくさんあって受皿もあるんだけど、都会と中山間地域というたら、もう全くというていいぐらい環境が違う。それを同じような言い方でやってくるんで、なかなか難しいんですけど、さっきのように学び続けていくという、子どもたちにもそうなんですけど、地域の人たちが学び続けてるという環境づくりをすることは、子どものいわゆる日常の中に生かせるというふうに思っています。先ほどありましたような社会教育、生涯学習の場において様々な取組を進めてもらってると思いますので、その状況や課題について担当課から説明をしてください。

○井上生涯学習課長 それでは、お手元に資料3の資料がございますので、その資料3の説明をさせていただきます。

1点、訂正があります。一番左上のところに獲得型ウェルビーイングと書いてございますが、正しくは獲得的ウェルビーイングでございます。大変申し訳ございませんでした。

それでは、社会教育における取組ということで、日本社会に根差したウェルビーイングの向上ということで御説明をさせていただきます。

このウェルビーイングにつきましては、よく2つの区分で説明をされることがあります。ここに書いてございますとおり、獲得的ウェルビーイング、こちらのほうは括弧にありますとおり自己肯定感、自己実現ということで、どちらかという個人それぞれの幸せであるとか生きがい、こういったことを感じられる状態になるかと思えます。

一方の、協調的ウェルビーイング、これは人とのつながり、社会貢献、利他性、こういった個人を取り巻く場であるとか地域社会、こういったことが幸せにつながっていくことがこの協調的と言われております。

この獲得的ウェルビーイングは、どちらかという個人の自由や権利を重視する欧米型ではこの傾向が強いと。ただし、日本の場合はこういった思いやり、他への思いやり、こういったところがありますので、特に日本でこういったウェルビーイングの向上を目指すことに当たっては、この両者のウェルビーイングの向上をしていくということが大切になっていく。これが、国の第4期教育振興基本計画の基本方針にもうたわれているところでございます。

以下、表のところは社会教育として生涯学習が行っている事業を区分分けをした資料になっております。

まず、獲得的ウェルビーイングの現在の取組といたしましては、学習機会ということで、リカレント教育であるとか市民大学講座への参加、この市民大学講座ですが、これは毎年テーマをいろいろ決めて市民の方に御参加をいただいております。例えば、防災であるとか国際理解、環境、人づくり、こういったものをテーマにしながら個人の学びにつなげていただくというふうな取組でございます。また、2つ目のところですが、図書館、公民館、勤労青少年ホーム、こういったところで講座であるとか自主サークル、こういった活動もされております。特に公民館については、市内で700以上のサークル活動がされております。

それで続きまして、スポーツでいいましたら、市内には充実したスポーツ施設がたくさんございます。こういったところで、競技力の向上であるとか体力、健康増進、気分転換のストレス解消、こういったところで個人のウェルビーイングの向上が図られているようなところでございます。

この獲得的ウェルビーイングにつきましては、これは今ちょっと利用者目線で書いているんですが、行政目線でもし言うのであれば、学習のきっかけづくりを提供していく、あるいはその機会の創出、あるいは場の創出、こういったものが行政としては必要になってくる取組かなと思っております。

一方の、協調的ウェルビーイングの現在の取組でございますが、一番上に

個々の学びを地域活動や課題解決に生かす取組が必要となってまいります。括弧で一つ地域での活動発表というのがございます。これは、例えば公民館の活動、コーラスであるとかそういったものを地域のいろんなところへ行って披露している、そういった取組もしております。例えば、コーラスとか尺八のグループが老人ホームや学校に行き行って演奏している、こういう取組もされております。

幾つか書いてあるんですが、3つ目の印のところです。地域学校協働活動、こちらはコミュニティ・スクールと併せて地域学校協働活動の一体的取組が必要ということで、こういった活動もこの協調的ウェルビーイングに該当するのではないかと考えております。

また、下から2つ目のところ、スポーツ推進委員の活動、こちらは市内に60名程度の推進委員さんがいらっしゃいます。推進委員さんが地域のほうへ出向いて、生涯スポーツの推進を図っていただいているような取組にもなっているとございます。

最後、スポーツへの様々な関わり、こちらは見る、支えるということで、例えばスポーツをするだけではなくてスポーツボランティア、こういった関わりをすることによって、人とのつながりということにもつながっているのかなと見ております。

それでは、それぞれの課題、方向性でございますが、まず獲得的ウェルビーイングの課題、方向性としましては、最初の丸でございます。様々な学習機会や情報の提供ということで、こちらはより多くの方が個人の学びに参加できるように、情報発信などが必要になってくるかなと見ております。

2つ目の丸でございますが、若者、無関心層への参加促進ということで、特に公民館でいうと若い方の利用が少ない、あるいはスポーツでも、スポーツする人しない人、二極化が顕著になっているというところで、こういったところへの参加促進も必要になってくるかと思っております。

3つ目の丸でございます。これは、多様化するニーズへの対応ということで、例えばスポーツでいうと、これまではどちらかというとチームスポーツが多くされておりましたが、アーバンスポーツであるとか、そういう個人でやるスポーツということも今ニーズが高まっております。こういった多様化するニーズへ対応する必要もあるかと思っております。

4つ目の丸、環境整備ということで、これは施設の老朽化であるとか整備、そういった対策であるとか、共生社会の実現ということで、年齢、性別、国籍、障害の有無、こういったものにかかわらず誰もが参加できるような環境づく

くり、あるいはデジタル活用ということで、施設になかなか来ることができない方もいらっしゃると思いますので、そういった方のオンライン講座であるとかそういったところも今後は整備として必要になってくるかなと思っております。

次に、協調的ウェルビーイングの課題、方向性のところがございますが、まず最初の丸でございます。個人の学びから地域活動につなげるための意識醸成ということで、例えば考えられるのが、こういった取組をされていることの事例の紹介、広報おのみちで事例紹介、こういったことも効果がある取組かなと思っております。

2つ目の丸、家庭、地域、学校の連携体制の構築ということでございます。

3つ目、関係機関との連携強化や活動団体拡大のための取組ということで、より幅広い連携につなげていく必要が今後はあるかと思えます。

4つ目、地域の実情に沿った取組ということで、特に地域学校協働活動、こちらについては、やはり地域の方にお話をお伺いしても、それぞれやり方が違うというところがありますので、それぞれの地域に沿った形の取組が必要になるかと思えます。また、部活動の地域移行については、やはり北部と島嶼部では取組の方法も違ってくるのかなと思っております。

最後の丸です。人材育成、こちらについては、例えば令和2年度から始まりました社会教育士、こういった資格を持った方を増やしていくとか、そういうことも必要になってくるかなと思っております。また、そういった人材育成をした後の多様な人材の活躍の場を後押しできる、そういった取組も必要になってくるのかなと思っております。

最後の四角のところでございますが、個人の幸せや生きがいでだけでなく、社会全体が豊かになる持続可能なウェルビーイングへの取組が重要ということで、最後締めさせていただきます。

資料については以上でございます。

○平谷市長 今、説明がございましたが、個人や社会全体のウェルビーイングと
いうのか、幸せ度の向上に向けたいわゆる社会全体が豊かになるための取組として何が
必要で、どうするのがよいかなということで、皆様方から意見をいただければありがたい
なと思えます。

全体としては、合併して来年が20年になりますので、それぞれの地域でやってきた取組
というのは、公民館に位置づけて、それによるまちづくりをしてきたという、旧市町で
いうとそれが御調と因島だけなんです。瀬戸田は、集会所を中心にして各区の区長さん
らが中心になりながら集落の取組をしてきたという町。向島町は公民館と名前がついた
施設はあるけど、ほとんど集会所よりも

もっと規模が小さい、それで合併して今中央公民館になってる、そういう施設をつくって、そこが活動の拠点になってるということです。それから旧尾道もいわゆる生涯学習的なまちづくりを、これを軸にしたということで取り組んでないので、公民館があるところとないところがあったり、様々な状況がありますから、それらを含めてそれぞれのまちづくりの歴史を大切にしながら取組は進めてきてるという状況がございます。

その中で、先ほど言ったように、合併してスポーツ施設は充実している、それは非常に大きい。御調町の場合は、ソフトボールと福祉の町ということをやって来て、そうした歴史を追いながら合併をしてきてということになるので、全体としてこういった視点で取り組めばいいんじゃないかというような考えや意見をお聞きさせていただければいいなと思います。村上節子さんからいってみましょうか。

○村上（節）委員 村上です。

私は、実はこの勤労青少年ホームの講座を今年、年齢枠がちょっと違うんですけど、講座の人数がちょっと定員割れしてるので来てもいいよって言ってもらって、体験してきました。

そういう場を知るということが、探そうとしないと知れない感じっていうのがもったいないなと思って、実は去年、おとしにも同じ講座を受講したことがあって、去年はちょっと忙しくてできなかったんですが、今年するときには友達を、またその子もちょっと年齢が違うんですけど、誘って、すごい楽しかったから行こうって行って、行ったような形なんです。

もうちょっとそういう、市でこういう取組してるっていうことを、広報以外の部分でももっと発信できるような方法があったらいいのになっていうのはすごく感じています。

○平谷市長 分かりました。

○村上（節）委員 あともう一ついいですか。ちょっと思ったのが、地域活動、今の協調的ウェルビーイングの枠の現在の取組の中の、地域の学校協働活動とかの中に地域ってあるんですけど、結構その地域での活動自体が、町内会なんですね。今私が住んでいるところでもそうですけど、果たして10年後この町内会はあるのかなっていう、ちょっと不安視する部分があって、それは今の80代とか70代のいわゆる後期高齢者といわれる方たちはすごく元気なんですけど、その人たちが多分いなくなったときに、今の60代、50代って、この人たちが今のその人たちと同じぐらいに頑張ってる空気感というのがあんまり感じられなくて、やらなきゃいけないことだけやって、プラスアルファやっていこうみ

たいな感じがないので、ちょっとそういったところも、この先本当に今の形、地域の活動自体がその形で残っていくのかな、どうなのかなっていうのも疑問視するところがあります。

○平谷市長 町内会の活動そのものが、多分、各町内によって違う課題を持ってるところがあるので、そのあたりは今後とも関係者と協議をしながら、どうやった形で町内会活動をしていくかというのは、大きいまちづくりの課題だと思っています。またいろんな形で意見を聞かせていただきながら取組をしていけたらと思っています。また、町内会の活動費の問題とか、それは町内会で差があるという、そのあたりも含めて今課題等を意識しながら取組を進めていけたらと思います。

それから、さきほどありました勤労青少年ホームの活動というのは、多分広報紙も置いとくだけのところが多い。中をじっくり見る丁寧な人もおるけど、その広報紙だけに頼って広報しましたというだけじゃ難しい。それでプッシュ型のLINEでやると、LINEの登録されてる人にはいくんだけど、これが度々LINEがくると面倒くさいって怒られる。

今、土曜日や日曜日も入ってくる市町もある。しょっちゅう入ると、受ける側にしたらまた来とるということになる。だから、広報の告知の仕方については、ちょっと課題を持ってるんで、また担当のほうと相談させてもらいながら進めていきたいと考えています。またいい意見があれば教えていただいたらと思います。

○豊田委員 豊田でございます。

今、生涯学習課の課長さんのお話を伺って、いろいろ行われている事業に対して、子どもたちを入れ込んですることはできないのかなということを私は前から思ってたんですけど。例えば地域の中でゲートボールなんかしておられるグループがあります。それから、何か自由に集まって歌ってるグループもあるんですけど、スポーツということに限れば、子どもたちの運動能力もちょっと下がってるということもありましたし、それから地域で遊ぶとか関わるとかということをあまりしないので、こういうふうには生涯学習からお年寄りと一緒にゲートボールしたりとか、何でもいいんです。そういう場が日曜日とか土曜日とか、1か月に一遍でもいいんですけど、そういうのがあるともっと親密にもなれるし、好んでできるかなと思うんです。それはどこを通してどうしたらいいのかなと私も考えてたんですけど、地区、地域のあれですかね。

○平谷市長 町内会によっては回覧で子どもを呼んで、このようにしましうと

やられてるところもありますが。

○**豊田委員** そうですか。できたら、そういうものに子どもを巻き込んでくださって、お年寄りと一緒に接する機会をつくってあげるのもいいかなと思うんですけど、どんなものでしょうか。

○**平谷市長** どうぞ。

○**井上生涯学習課長** ありがとうございます。

私もスポーツの担当課として、例えばグラウンドゴルフ、高齢の方が一生懸命頑張られて、もし若い方がそういった大会に参加しても、恐らく若い方は日々の練習をしてないので勝てないんです。そういう3世代で交流をして、やっぱり日々頑張ってる方はすごいんだよみたいな、そういうこともできないかなというような、そんなことを考えながら、いろいろあれやこれや考えてるんですが、今、部活動の地域移行を、これは小さい子どもさんではないんですが、部活動の地域移行で今やろうとしているのは、スポーツだけではなくて公民館の活動、こういったところに土日、中学生の生徒さんが参加できないか。そうすることで、いろんな交流が生まれて理解が進むんじゃないかな、ちょっとそういった取組も今考えているところでございますので、ぜひともいろんな子どもさんを巻き込んでやるという考え方は、これからの活動には絶対必要なことだと思いますので、いろいろちょっと考えていきたいと思います。皆様方からもアドバイスをいただければと思います。

○**平谷市長** 今年の盆踊り、うちの地区の盆踊りに尾道高校のラグビー部が出てきて、物すごくみんな、おじいちゃんおばあちゃんもみんな若い子の熱気で元気になったんです。毎年来てくれとあってね。だから、若い者がいろんな行事に参画するというのは、元気になる源だというふうに思います。

はい、どうぞ。

○**奥田委員** 奥田です。

子どもの参加ということで、社会教育におけるウェルビーイングで、やっぱり趣味を持つというのはすごく大切なことだと思うんです。人生を幸せに送るために、趣味がない人っていうのはやっぱり寂しい。同級生を見ていても、趣味がない者は元気がないなという感じです。しっかり趣味を持つという中で、公民館などでいろんなものを学ばれるというのも一つの手段だと思うんです。

ちょうど図書館に関わってますので、図書館で子ども茶道教室というのをやってるんですけど、毎年20人ぐらい。それはやっぱり、小さいうちから日本の伝統芸能である茶道を先生から教えてもらうっていうことで、1年間で子どもたちはすごい成長します。こんなに茶道のいいところを学んで成長してるんだ

なというのを感じます。子どもたちにそういう日本のよき伝統文化を教える会が増えればいいなというふうに思います。

今年から図書館では、子ども囲碁講座というのもスタートしたので、これは向島図書館も既にやっていることですが、やっぱり子どもたちを見てると、もうすごい生き生きとして、成長が早いです。大人よりもすごいスピードで上達する。やっぱり若いうちからやるというのはいいことだなと。私も若いときにこういう講座があって、碁を学んでいれば自分の人生はもっと豊かになったんじゃないかなと思うことも多いんですけど、そういうふういろんな機会をやっぱり与えてやる、尾道には指導できる方もたくさんおられますから、それが尾道の強みではないかなと思います。全校生徒という、網羅するというのはなかなか難しいかも分かりませんが、できるところからそういう子どもに何とか講座、太鼓講座でもいいですし、どんどん増やしていったら、それはやっぱり学力プラス生きる力になると思うんです。やっぱり学力もしっかりつけないといけないんですけど、学力で補う、それは相乗効果で、いろんな趣味を持つことによってまた学力に集中力ができて、また勉強も頑張る、趣味のほうも頑張ると、そういうふうに両立できればいいと思うんですけれども、そういう機会を提供するようなシステムができれば、もっともっと尾道の子どもたちは豊かな子ども時代が送れるんじゃないかなと思います。

○平谷市長 因島でやっていた囲碁を、それは合併して約20年、尾道市になって引き続いて市の技囲碁というんで、盛り上げてきました。因島高校に囲碁部ができて、全国大会を目指してというような話になって、女子が参加したこともあるんですけど、そういう流れで尾道北高にも囲碁部ができてという、その市の技にしたきっかけがあるんで、何かお茶も考えたらよいのかなと思います。日本の伝統のそういったものを引き継いでいくというのは、また課題にして、生け花は子どもいけばな教室というのをやって、文科省のほうもそういうのにはお金をつけたりとかというのがあるので、ちょっとどういったことができるか、何ができるかまた考えてみてやってください。

○村上（正）委員 村上です。

生涯学習とか社会教育を強くすると、それが一番いいんですけども、なかなか難しいんでどうなのかなと思うんですが、今50代、60代の私らの世代で独居の場合、そういう人らを巻き込んで何かできればいいなとは思っています。消極的な人を誘っても面倒くさい、行きたくないとかと言われると思うので、以前因島で、私の地域は中学校の体育祭の後に町民大会を続けてやってたんです。実は今、町民大会も、先ほど市長さんが言われた盆踊り大会も全然ないんです

けども、中学校の運動会の後に町民大会的な、子どもも参加する、中学生も参加する、何だったら小学生も参加するような町民大会を企画すれば、孫が出るとか、子どもは出ないにしても親戚の子が出るとかといたら、こういう50代、60代の方も来るんじゃないかなと。なぜそういう話をするかという、町民大会があった頃、やっぱり近所の人と話をするんです、半日なり。そうすれば親しくなって、溝掃除をしましょうとかというのもしやすくなるし、社会的なことでもできるようになる。今はもう、近所といっても空き家が多くて、なかなかコミュニケーションが取れないという状況なので、何かそういった、難しいことはできませんけども、町民大会ぐらいだったら、ちょっと中学校の先生は大変でしょうけど、していただければすごくうれしいなと思います。

○平谷市長 交流ができる活動をどう仕組んでいくか、子どもも巻き込んでという話になると、それは、またテーマとして考えていただけたらと思うんです。実際に先ほど話があったように、学ぶ、それが生きがいになる、それが友達の輪が広がるというのは非常に大切なことだと思うので、何を趣味にするか、何を学びにするかというのはずっとついてくるものだと思いますから、逆にそういうことを意識しながら場の提供をするとか、先ほど言われた広報、学び方ができる場所をどういうふうにするとか、一つそういう意味では考えていただけたらありがたいなと思います。

それで、今日は美術館からも資料が出ていますので、説明をお願いします。

○新苗美術館長 失礼します。資料4をお願いいたします。午前中に豊田委員さんからも感想をいただきました先日の造形教育研究大会で、同じような内容になります。ただ、教育普及というのは様々な側面がありますので、ウェルビーイングの面から御紹介をさせていただきたいと思います。

最近、美術館を含めて博物館全般なんですけれども、鑑賞するために外出をしたり、歩いたり、あと様々な刺激を受けること、それから知的好奇心の充足などにより、癒やしやリフレッシュ効果、それからストレス軽減や健康増進、フレイル予防など、たくさんメリットがあって、新たなウェルビーイング資源として着目されています。

また、こういった場でいろんな行事に参加したりするアートコミュニケーションにより社会的な孤立を防いで、個々のウェルビーイングが家庭や地域に広がっていく効果もあると言われております。

尾道市立美術館では、様々な入館料の減免、それから車椅子、ベビーカーの貸出し、授乳スペースの確保など、こういった環境の配慮と併せて講演会やワークショップ、ミュージアムコンサートなどの普及事業に取り組むことによっ

て、多様な人々に鑑賞や体験の機会を提供しています。

それから普及事業をなぜ行うか、メリットっていうのをちょっと書かせていただいているんですけども、一番の目的としては美術館に来ていただくきっかけづくり、それから展覧会をより楽しんでいただく、こういったことが一番大きな目的として実施しているんですけども、こういった取組によって様々なつながりが生まれ、先ほども申し上げましたが、個々のウェルビーイングが美術館から家庭や地域に広がっていくと考えています。

ページをちょっとめくっていただいて、次は少し法的な根拠みたいなことを書かせていただいているんですけども、博物館法の第3条、博物館の事業には、地域の活力の向上に寄与するよう努めるものとする明記されておりまして、こちらの市立美術館の設置管理条例などにも、美術館の活動は展覧会など鑑賞の機会の提供だけではなくて、様々な普及活動とか体験を提供することも位置づけられています。

続いて、ここからは具体的な普及事業の御紹介をさせていただきます。

まずは、展覧会をより深く楽しんでいただいたり理解を進めるために、講演会とかギャラリートークというのを開催しています。シュシ・スライマンのときは、まだ現存作家ですので、御本人の口から自分のアートへの取組とか見どころをお話ししていただいたり、先日の中川一政と小林和作の展覧会のときは、これはどちらの先生のほうも作家を生前に知っている方に来ていただいて、人となりとか作品の魅力について話していただきました。

続いて、今のはどちらかというと大人バージョンだったんですけども、子ども向けにもやはり展覧会を理解してもらおう、ちょっと案内資料というような形で鑑賞資料を作成して、これは市内の小学校に配布しています。展覧会の会期中にこれを持ってきていただくと、本人は、子どもはもともと無料なんですけれども、付添いの保護者の方1名が無料となる、こどもと大人の鑑賞会というのを開催しています。

こちらは、以前はわいわい・がやがや・おしゃべり鑑賞会という対話型の鑑賞会をやっていたんですけども、ちょっとコロナでわいわいがやがやができなくなって今の形に変わってるんですけども、そろそろタイミングを見て戻したいなとは思っています。インフルエンザや感染症との兼ね合いがあって踏み切れてないんですけども、やはり対話をしながら見ていただくというのが子どもさんたちにとっても理解の助けになりますし、あと保護者にとっては、やはり美術館って静かにかしこまって見なきゃいけない、ちょっと子ども連れでいくのはどうなのかなっていうようなためらいがあったりするんですけど

れども、こういった機会、いつもはやっぱり静かに見ていただきたいんですけども、思い切りそういう感想を口に出したり親子で話をしながら見てもらえるような、やはり機会は設けていきたいなと考えています。

続いての偏光板アートプロジェクトですけれども、地元の日東電工さんに御協力をいただいた制作系のワークショップで、具体的な展覧会の内容とは直接はリンクしていないんですけども、美術館ですので光や色について科学的に説明をしてもらったり、体験をしてもらうようなワークショップをしています。ちょっと低学年では、この理屈はなかなか難しいんですけども、本当に実際に起こる現象を見ると、もう手品みたいな感じで、わあって声もいつも上がりますし、興味を持ってもらえるのではないかと考えています。

次の日本画のワークショップですけれども、こちらは具体的に日本画を描くというよりは、なかなかふだん体験できない岩絵具、こういったものを触って使ってもらうことを目的としたワークショップなんですけれども、こちらは尾道市立大学と、それからちょっと学校に行きにくい子どもたちが行っている教育支援センター、それから美術館での連携事業として行いました。

美術館は、場所の提供といろんな調整、それからワークショップの中身とかこういった材料の準備は大学、それから参加者のほうの調整は教育指導課さんというふうに分担することでそれぞれの負担はかなり軽減できるんですけども、効果は大きいと感じました。これはちょっとまだ1回しかできていないんですけども、この3者がつながることができましたので、また次の機会にいろんなことが展開していけるのではないかなと思います。

それと、このときに出来上がった作品というのも、コレクション展のときに美術館のほうに展示をさせていただきましたので、結構やはり家族で美術館に展示されたものを見に来ていただいたっていうのもありますので、訪れていただくいい機会になったのではないかなと思います。

次のものは、これはもう展覧会そのものが色鉛筆アート展でしたので、ごく単純に塗り絵のワークショップをしたんですけども、子どもさん向けには、先ほどの大人とこどもの鑑賞会のときに合わせて自由に好きなときに来て書いてもらう、それから大人向けは、この展覧会に実際に出品している作家さんに来てもらって、ちょっと本格的な教室っていうような形で、大人と子ども、それぞれ内容を変えて開催しました。

続いては、文化財のほうと連携をした事業になります。美術館だけでやっても、なかなかそれぞれ専門家があらゆるジャンルをカバーする人がいるわけではありませぬので、うまくそれぞれのところがもともと持っている事業

を活用しながら、より広がりを持たせたらいいなということで、ちょっと試行的にやってみたものなんですけれども、シュシ・スライマン展というのは現代アートなので、なぜここで縄文かっていうような形で思われる方もいらっしゃるんですけれども、御本人のテーマの中にずっと縄文を意識した創作活動っていうのをされていまして、文化財の担当のほうで、尾道は太田貝塚がありますので、太田貝塚を中心とした松永湾沿いの縄文貝塚の講演会、それから午後からは子ども向けに縄文土器づくりを実際にやってみようというようなワークショップを開催しました。

それから、海からの贈りもの展、こちらは真珠やこはくなど海からもたらされる素材でできたものの宝飾展だったんですけれども、もちろん尾道は海とともに発展した町ですので、海から伝わってきたもの、そういったものの講演会、それから実際に尾道遺跡から出土した食器などの出土物とか、それからあとナウマン象の骨とか、こういったものも持ち込んで参加者にも見ていただきました。

もちろん、展覧会に広がりを持たせるというものもあるんですが、私たちとしては歴史文化に興味を持った人を美術館の来館者として取り込んでいきたいという、ちょっと下心もあったりして、こういうジャンルが違うところの事業と連携して、もっとやっていけたらいいなと考えています。

続いて、ミュージアムコンサートなんですけど、こちらやはり音楽に興味がある方たちに、まずは美術館に来ていただきたいということと、それからもちろん美術館に来てる人たちに別の楽しみも提供したいということで開催しています。

やはり美術館でやるコンサートですので、事前に展覧会の図録とか資料もお送りして、できるだけ展覧会、それから尾道と関わりがあるプログラムを一緒になってつくり上げていっておりますし、単独でやるとやはりちょっと費用の問題なんかもありますので、文化振興課とか平山郁夫美術館とか、いろんなところにお声がけしながら何か所かで開催したり、プログラムの内容も相談しながら進めています。

続いて、尾道市の美術館ネットワークなんですけど、こちらはさっきちょっと市長からもお話があったかと思うんですけれども、合併によって市内に彫刻、それから洋画、日本画、あと博物館ですけれども茶道具や仏教美術など、特色を持っている5つの美術館と博物館が尾道の中に存在してるんですけども、これはとても大きな魅力だと感じています。

合併した当初はあまり連携はなかったんですけれども、6つの施設でネット

ワークを組んで共通のパンフレットを作ったり、あとこちらに今体育館にずらっと絵を並べて、これは審査してる風景なんですけれども、これは平山郁夫美術館の絵画コンクール、これの開催についてはネットワークで協力して、こういった審査会もお手伝いしたり、それから入賞作品の展示を平山郁夫美術館でもするんですけれども、尾道市立美術館のほうでも開催するというような連携事業をやっています。

それから、夏休みには、それぞれの美術館が同じ時期にワークショップをやって、皆さんにちょっと巡回というか、いろんなところへ行ってもらいたいなっていうことで、夏休みにこういった子ども向けの事業も開催しています。

各美術館には、やはり学芸員は1人か2人という、もう少人数しかいないですし、割とメンバー的には固定されてしまうんですけれども、こういったネットワークで交流することで、情報交換もですし結構愚痴を言い合ったりといったことで、働く人のウェルビーイングにもつながっているのではないかなと思っています。

このネットワークでは、来年の3月に、今度の春なんですけれども、合併の20年ということもあって、初めて桜のお花見と美術館を楽しんでいただくという企画で、圓鏝さんのところは周りがとても桜がきれいですし、尾道市美も桜の名所の中にあります。なかた美術館も桜土手がありますし、耕三寺とか、あと向上寺の辺りとかもたくさん桜がそれぞれ美術館の周りにありますので、お花見と美術館を楽しんでいただくような、今ちょっとスタンプラリーとかいろんな企画をしてるんですけれども、やはりみんなでつながって一緒に考えるからこそできるような企画というのも進めていきたいなと思っています。

今、様々普及事業を御紹介させていただいたんですけれども、絵というのは割と便利で、1つの絵からでも切り口がいろいろあって、歴史、作家、技法、色、いろんなことが取り組むきっかけとかネタにはなるんですけれども、やはり人手が少なかったり、専門分野もいろいろ限られてくるっていうのがあるんですけれども、先ほど文化財やコンサートでも申し述べたんですけれども、既存の事業をうまくつなげながら、お互い連携して分担するというので、いろんなことがまだまだできるんじゃないかなと思っています。

最近では、大原美術館さんなんか町歩きを積極的に取り入れて、フレイル予防っていうのを美術館で取り組んだりしてしまして、まだ当館はできてないんですけれども、福祉分野とかともこれから広がっていくんじゃないかなと思っています。

最後のページになるんですが、尾道市美は直営館ですので、こういった機会

とかで行政の中の動き、いろんな課がどんなことをしているかなっていうのも比較的に見えますし、通常の美術館の活動で大学とかいろんな美術団体とかまちづくりの団体がいろんなことをやってたり、要望っていうのも見えてきますので、自分のとこで普及事業をするだけではなくて、いろんなものをうまくくっつけるプラットフォーム的な役割をしていくことで、もっともっと地域のウェルビーイングに貢献できるのではないかと考えています。

以上です。

○平谷市長 冒頭、話をさせていただいたように、これだけの人口規模でこれだけのいわゆる今の美術館、博物館を持っているのは、多分全国でもないんです。それをどうやって市民の人に使ってもらうか、あるいはそれを教育にどうするかというのは、資源、あるものを最大化しようとするのが一つのテーマだと思います。

それで、今いろんな形で国の内閣府のほうと調整をしているところがあって、補正で新型の「新しい地方経済・生活環境創生交付金」とかというものです。明日ぐらい、政策企画が窓口で、その内容を受けるので、それが地方創生にどのような形で結びつくのか。地域の資源をどのようにまちづくりに活かすかというので、交付金にあてがうような事業プランができれば、それを取りにいくことができる。強みを活かすと言ったら、これは本当に最大の強みの一つだと思うので、それを活かしていくということだろうと思います。

それで、来年の3月頃になるんですけど、院展を平山郁夫美術館で開催すると。従来、広島福屋でやっていたんですが、それができるような状況になくなってるので、平山郁夫美術館でやろうと。これは、大学の中村先生らが院展に関わっておられて、進めていけるんですけど、しっかり院展を開催し、PRもさせていただいたらと思っています。先ほどあったように、広報をどうするかというのがあるので、もうちょっと教育委員会も自慢したほうがいいのかもしれないですね。謙虚にいくだけじゃなくて、市民が誇りを持てるような取組として伝えていくことだと思います。

これは本当に、先ほど言いました生涯学習、学びにつながる。尾道の持つてる、有する資源というのか、2日前に松江の市長が尾道へ来て、美術館で対談したんです。そしたら、あそこから見える景色が絶景で、松江から出てくるときはどんよりした曇り空でしたが、こっちへ来たら青空で、もう関係者にしてみたらすばらしい、高見山が正面に見えて色が変わってる、四国まできれいに見えて、だからその景色こそが多分、小林和作さんが言われてたいわゆる景色、誇るべき秀逸の景色なんだと思うんで、もう少しみんなで自慢したほうが

いいのかなと。

もうこれは合併したから今のように豊かになってきたわけで、豊かになったものをどういうように新しい切り口で生かすかというのが、ちょうど来年度からの取組につながっていくようになればと思っています。学校教育も社会教育も課題はあるんですけど、その課題を克服しながら新しい時代に向かって取り組んでいけたらと思います。

とりわけ学校教育については、時々教育事務所の所長と話をしますが、広島県の教育全体として尾道に頑張ってもらっていて、これからもお願いをしたいと。市町ごとに学力の差があって、それは学力を上げるという話、学力低下してるというのはなかなか上げることが難しいので、尾道の場合は今しっかり安定した形のもので、不登校の課題はあるにしても、学校全体が落ち着いている。中学校でも今荒れてという状況はない。そのような形を継続しながら、併せて子どもたちが尾道で学んでとか、お父さんお母さんがよかったと思えるようなことを、またこれからも取り組んでいくということで、それがウェルビーイングという言葉につながるんだろうと思います。今後とも教育委員の皆様方にはそれぞれの感じられてることを提言いただければありがたいと思っています。

今、朝ドラでおむすびというのをやってて、さっき村上節子さんが言われたように、食がやっぱり体をとというベースになるとか、基本的なことももう一度見直しながら、市長部局も一緒になって取組をして、尾道はいい町だなと言えるように取り組んでいきたいというふうに思いますので、今後ともよろしくお願ひします。今日はありがとうございました。

○末國庶務課長 ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして令和6年度第1回尾道総合教育会議を閉会いたします。

お疲れさまでございました。

午後3時13分 閉会